

病害虫発生予察情報(1月予報)

令和5年12月27日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・すずかび病	発生量：やや少 (発病株率9.7%)	12月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率3.9%)	12月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率2.7%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率9.8%)	12月中旬発生量 黄化葉巻病：少 コナジラミ類：多 気象予報：気温：高い (一)
	ハモグリバエ類	発生量：並 (寄生株率1.0%)	12月中旬発生量：やや少 気象予報：気温：高い (一)
だいこん	白さび病	発生量：少 (発病株率7.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：やや少 (発病株率2.0%) アブラムシ類発生量：多 (寄生株率3.0%)	12月中旬発生量 モザイク病：少(発生なし) アブラムシ類：多 気象予報：気温：高い (一)
	コナガ	発生量：多 (寄生株率0.4%)	12月中旬発生量：多 フェロモントラップ誘殺数：並 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	ナモグリバエ	発生量：やや少 (寄生株率：17.9%)	12月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
キャベツ	菌核病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
たまねぎ	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率0.0%)	12月中旬発生量：並(発生なし) ホトリチス拮抗剤12月中旬発生量：やや多 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	腐敗病	発生量：多 (発病株率1.4%)	12月中旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)

作物名	病害虫名	予報 (1月の県平均年値)	予報の根拠
たまねぎ ねぎ (白ねぎ)	ネギアザミウム	発生量：やや多 (寄生株率29.3%)	12月中旬発生量：並 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	さび病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	べと病	発生量：少 (1月平年値なし)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：少 (発病株率1.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率2.0%)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	灰色かび病	発生量：少 (発病株率0.5%)	12月中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
いちご	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率1.3%)	12月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	炭疽病	発生量：やや多 (発病株率1.1%)	12月中旬発生量：並 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率1.6%)	12月中旬発生量：並 防除員からの報告：やや多 気象予報：気温：高い (一)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率13.3%)	12月中旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)
	アザミウム類	発生量：多 (寄生株率2.3%)	12月中旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：ほぼ平年並 (一)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づいた発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。



**農薬情報
はこちら
で検索!**



**静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準**

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●葉かび病・すずかび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は4.8%（平年12.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すずかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（CF-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。

- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.6%（平年発病株率3.0%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は感染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバコナジラミ）

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年3.4%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率21.7%（平年11.8%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫タバコナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・ 卵や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバコナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源となるため、栽培終了後は植物体を完全に枯死させてから施設外へ持ち出す。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.7%（平年2.2%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕に注意し、発生が認められる場合は薬剤防除を実施する。本種は幼虫期間が数日から1週間程度と短いため、初期の絵描き症状を見つけ次第、薬剤防除を実施する。

【だいこん】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年発病株率2.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、発生を特に助長しない（本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である）。

防除対策

- ・ 発病残遺は翌年の伝染源となるため、ほ場に放置しない。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病(アブラムシ類)

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年発病株率1.8%)。
- ・ 本病の媒介虫アブラムシ類は、一部の調査ほ場で多発した影響もあり、平均寄生株率16.5%(平年2.3%)と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、アブラムシ類の増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が急増する場所があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.3%(平年0.6%)と平年より多かった。
- ・ フェロモントラップによる本種の誘殺数は、平年並に推移している。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発生が多い場合は、薬剤を葉裏にかかるように散布する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.8%(平年9.3%)と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 上位葉に白点(産卵痕)や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、防除を実施する。

【キャベツ】

<生育の概況>

収穫期に入っていて、生育は平年並である。

●菌核病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年発病株率0.4%)。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期に散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年より7～10日程度進んでいる。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった(平年発生なし)。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがある(ポトリチス葉枯症)が、その平均発病株率は1.4%(平年0.3%)とやや多かった。

- ・ 本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 春期収穫の作型では、過剰な施肥や肥料の運効は本病の発生を助長するため、適切な施肥管理に努める。
- ・ 葉身に白斑や葉先枯れが見られるほ場や例年発生が見られるほ場は、鱗茎への感染を予防するため、薬剤による防除を実施する。複数回散布する場合は、系統の異なる薬剤を選択する。
- ・ 罹病球やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.8%(平年0.4%)と平年よりも多かった。
- ・ 病原細菌の生育適温は20～23℃で、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病に対する防除は、定期的な薬剤散布よりも、感染の機会が生じる前後をねらった防除の効果が高い。このため、気象情報に注意し、強風雨の前後に薬剤散布を行う。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、今後の感染防止を図る。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は24.2%(平年26.1%)と平年並だった。被害を示す被害度は18.7(平年14.0)と平年よりも高かった。

- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 例年1月は特に防除の必要はないが、暖かい日が続くと増殖を始め、生息密度が高まるので、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。

【ねぎ（白ねぎ）】

<生育の概況>

収穫は平年並～7日程度遅れている。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率3.5%）。
- ・ 本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期に散布を行う。複数回散布する場合は、系統の異なる剤を選択する。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・ 本病は、気温15～20℃で降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫期に入っているほ場では防除の必要はないが、1月下旬以降に収穫予定のほ場では注意が必要である。
- ・ 薬剤散布は予防散布や発生初期に散布を実施する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育は平年並～早い。

●べと病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率1.0%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特に助長しない（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。
- ・ トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるので注意する。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 罹病残渣はほ場外に処分する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.7%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を特に助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが重要である。
- ・ 降雨が続くとときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高湿多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●藍核病

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.3%）。
- ・ 発病後の薬剤散布では効果が劣るため、常発地では定植後30～40日で、本葉が8～10枚程度出葉した頃を目安として予防散布を行う。
- ・ 発病株には菌核が形成されて伝染源となるので、ほ場に放置せず速やかに撤去する。

【いちご】

<生育の概況>

県下全域で生育は平年よりやや遅い。巡回調査時点では、概ね第一果房結実期にあたる。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率0.3%）。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行うこと。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために葉液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.4%（平年1.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生を助長しやすいため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.0%（平年1.1%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 周囲の健全な株へ容易に伝染が生じるため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて場外へ出す。放置残渣は伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。

- ・ 発病後は薬剤による治癒が困難なため、定期的な予防防除を心がける。特に下葉除去など株が傷つくような作業後は、重点的に予防を行う。なお、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・ 越冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかるため萎凋症状が進展する可能性がある。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.1%（平年2.6%）と平年並であった。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生については4名が「やや多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 冬期は施設内への侵入は少なくなるが、寄生を認めた場合は少発生のうちに防除する。
- ・ 天敵を利用して防除する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は26.0%（平年16.9%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 12月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.8%（平年2.1%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花における発生状況をよく観察し、寄生を認めた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発する場合は、開花初期の防除を徹底する。

3 季節予報

●1か月予報 (東海地方 令和5年12月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12月23日から1月22日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		2週目は気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月	天候	平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	50	30
	気温	10	10	80
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

1か月 : 12月23日(土)～1月22日(月)
 1週目 : 12月23日(土)～1月29日(金)
 2週目 : 12月30日(土)～1月5日(金)
 3～4週目 : 1月6日(土)～1月19日(金)

※利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気目数は、平年の目数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の目数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒488-0803 磐田市雷丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.agri-exp.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫発生予察情報(2月予報)

令和6年1月30日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (2月の県平均年値)	予報の根拠
トマト	灰色かび病	発生量：並 (発病株率6.5%)	1月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや多 (発病株率6.1%)	1月中旬発生量：やや少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率2.4%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率7.7%)	1月中旬発生量 黄化葉巻病：少 コナジラミ類：多 気象予報：気温：高い 1月下旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
たまねぎ	腐敗病	発生量：多 (発病株率1.2%)	1月下旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率0.0%)	1月下旬発生量：並(発生なし) 気象予報：降水量：並か多い
レタス (非結球 レタスを 除く)	ネギアザミウマ	発生量：並 (寄生株率32.0%)	1月下旬発生量：やや少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	べと病	発生量：やや少 (発病株率1.4%)	1月上旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	斑点細菌病	発生量：やや少 (発病株率2.4%)	1月上旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率0.8%)	1月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
いちご	うどんこ病	発生量：やや少 (発病株率0.8%)	1月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率0.9%)	1月中旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率1.6%)	1月中旬発生量：並 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率12.7%)	1月中旬発生量：並 (ただし、複数ほ場で多〜甚) 防除員からの報告：やや多〜多 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率5.2%)	1月中旬発生量：やや多 防除員からの報告：やや多 気象予報：気温：高い 降水量：並か多い

表の見方について

- 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

**農薬情報
はこちら
で検索!**




**静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準**

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は概ね平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.7%（平年3.9%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・朝夕の急激な冷え込みによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は8.1%（平年9.7%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（C₁-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は0.3%（平年2.7%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類は、平均寄生株率19.4%（平年9.8%）と平年より多かった。

- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させるとともに、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ15～20日遅んでいる。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、一部のほ場で発生が認められ、平均発病株率3.5%（平年1.4%）と平年より多かった。
- ・本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、感染が助長される。

防除対策

- ・傷んだ葉がある場合は、降雨の前後に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、鱗茎に発生は認められなかった（平年発生なし）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状（ボトリチス葉枯症）が現れることがあるが、ボトリチス葉枯症の発生は認められなかった（平年平均発病株率1.0%）。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。
- ・ 被害株やくず草は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率25.3%（平年29.3%）と平年よりやや少なかった。被害程度を示す被害度は、20.4（平年15.4）と平年よりやや高かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並が多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 収穫が2月中旬以降で、本種の発生が確認されたほ場では防除を実施する。成幼虫とともに葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育はやや早い傾向。

●べと病

予報の根拠

- ・ 1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率1.5%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量が平年並が多いため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。

防除対策

- ・ 本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 罹病残渣はほ場外に処分する。
- ・ トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率2.0%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並が多いため、本病の発生をやや助長する。またトンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるため注意する。
- ・ 本病は比較的低温で多湿条件を好む。また凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●ピグベイン病

- ・ 1月上旬の巡回調査では、平均発病株率1.0%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・ 本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保菌菌量を少なくするように心がける。
- ・ 例年、志太地区で発生が多いため、当該地域では特に発生に注意する。

【いちご】

＜生育の概況＞

生育は県下全域で平年よりやや遅く推移しており、概ね7日程度遅れている。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年0.5%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並が多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的防除を行うこと。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬剤散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の運用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年1.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.5%（平年1.1%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残渣は伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・ 越冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合があります。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.5%（平年1.6%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生を認められた場合は少発生のうちには防除する。
- ・ 天敵を利用してはいる場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は14.7%（平年13.3%）と平年並であったが、多～甚発生は場も複数見受けられた。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」、1名が「多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 寄生が認められた場合は、少発生のうちには防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵の追加放飼または天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.4%（平年2.3%）と平年よりやや多かった。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のうちには防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・ 例年多発する場合は、開花初期の防除を徹底する。
- ・ 天敵を利用してはいる場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【稲】

＜その他の病害虫＞

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。
- ・ 昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 本種は低温に比較的弱い。土中の貝は生き残るため、2月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・ スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触れる場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

＜その他の病害虫＞

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年4月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は52.6%（平年12.6%）と平年より多かった。また、赤さび病の平均発病株率は3.6%と平年より多かった（平年1.9%）。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。またうどんこ病の第一次伝染源は、前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は、ほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

【茶】

＜その他の病害虫＞

●赤穂病

- ・ 病原菌は細菌であり、主に強風による傷口から感染する。また、本病は寒害、凍害、霜害によって発生が助長されるため注意する。
- ・ 常発ほ場では予防的に薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、「つゆひかり」、「おおくひかり」などの品種は本病に弱いため注意が必要である。

3 季節予報

●1か月予報 (東海地方 令和6年1月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月27日から2月26日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、平年並の確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	10	20	70
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 1月27日(土)～2月26日(月)
 1週目 : 1月27日(土)～2月2日(金)
 2週目 : 2月3日(土)～2月9日(金)
 3～4週目 : 2月10日(土)～2月23日(金)

※ 利用上の注意

- ・ 気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めています。(気候的出現率と呼びます)。
- ・ 晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 千438-0803 磐田市雷丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫発生予察情報(3月予報)

令和6年2月28日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (3月の県平均年値)	予報の根拠
茶	赤焼病	発生量：少 (発病葉数0.01枚/1.25㎡)	2月上中旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	カンザワハダニ	発生量：多 (樹冠面寄生葉率0.9%)	2月上中旬発生量：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率9.2%)	2月中旬発生量：やや多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多 (発病株率5.5%)	2月中旬発生量：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
トマト	黄化葉巻病 (タハココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率2.4%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率8.4%)	2月中旬発生量 黄化葉巻病：少 コナジラミ類：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	腐敗病	発生量：多 (発病株率4.7%)	2月中旬発生量：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率0%)	2月中旬発生量：並(発生なし) 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率39.8%)	2月中旬発生量：少 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
いちご	灰色かび病	発生量：並 (発病株率2.3%)	2月中下旬発生量：並 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	うどんこ病	発生量：少 (発病株率1.0%)	2月中下旬発生量：少 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率1.1%)	2月中下旬発生量：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	アザミウマ類	発生量：多 (寄生株率11.7%)	2月中下旬発生量：多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率12.9%)	2月中下旬発生量：やや多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率2.2%)	2月中下旬発生量：やや多 気象予報：気温：ほぼ平年並(土) 降水量：ほぼ平年並(土)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

**農薬情報
はこちら
で検索!**



**静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準**

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【茶】

<生育の概況>

例年に比べ、寒害と思われる症状の発生は少なかった。

●赤燒痕

予報の根拠

- ・ 2月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.07 枚/1.25 m²）。
- ・ 1 か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 幼木園や「つゆひかり」は特に本病に弱いので発生に注意する。
- ・ 昨年発生が見られた茶園や常発茶園では、3月上旬に薬剤による防除を行う。発生が広がるようであれば、1 回目防除の 20 日後を目処に追加防除を行う。
- ・ 本病は、強風雨などで傷害を受けると発生が助長される。現在、発生が見られない茶園でも、これからの発生に注意し、発生が見られたら早めに防除する。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 2月上旬の巡回調査では、樹冠面での平均寄生葉率は 1.6%（平年 0.4%）、裾部での平均寄生葉率は 3.4%（平年 1.2%）と、平年より多かった。
- ・ 休眠調査の結果、越冬雌成虫は、調査時点で 98.1%（平年 79.8%）が非休眠であり、産卵を始めている。
- ・ 1 か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並なため、発生の増加も平年並と予想される。

防除対策

- ・ 樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早めに防除を行う。葉裏に薬液が十分届くように散布する。
- ・ 裾部の葉に寄生が見られる茶園では、発生に注意し、ハダニが樹冠面上がってくるようであれば早めに防除を行う。

【トマト】

<生育の概況>

生育はやや早い～やや遅く、地域によりばらつきがある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 8.6%（平年 6.1%）と平年よりやや多かった。
- ・ 1 か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は 18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（例として、不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最小限にする）。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。薬剤耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。
- ・ 発病した果実や茎葉の表面には病原菌の胞子が多量に形成されて伝染源となる。そのため、発病部位および残さは速やかにほ場の外に持ち出して処分する。
- ・ 植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 2月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 13.2%（平年 6.1%）と平年より多かった。
- ・ 1 か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。なお、ハウスの密閉は多湿となりやすく、本病の発生を助長するため注意する（本病の生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、抵抗性品種（CF-9）を優先レース 2.9 の発生が県内で確認されている。本県では 12 月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が 2 週間程度と長く、多発してからは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバコナジラミ）

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率0.6%（平年2.4%）と平年より少なかつた。
- ・コナジラミ類は、平均寄生株率14.6%（平年7.7%）と平年より多かつた。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、媒介虫であるタバコナジラミの増殖も平年並と予想される。このため、本病の発生の増加も平年並と予想される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバコナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や、黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ15～20日程度進んでいる。

●腐敗病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均発病株率2.8%（平年1.2%）と平年よりも多かつた。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。

防除対策

- ・収穫時期を迎えているほ場では、できるだけ降雨の前に収穫し、降雨後は、鱗茎が十分乾いた後に収穫する。
- ・罹病株は、ほ場付近に放置すると発生源となるため、ほ場外に持ち出して処分する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、発生は認められなかつた（平年発病株率0%）。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を特には助長しない。また、本病は例年発生が確認されていない。

防除対策

- ・罹病株がある場合には、早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分することで来年度の伝染源にならないようにする。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・2月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は22.8%（平年32.0%）と平年より少なかつた。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・収穫期を迎えているほ場では、特に防除の必要はない。中～晩生品種が栽培されている、収穫まで期間を要するほ場では発生に注意し、密度が高まる前に薬剤防除を実施する。
- ・株元の葉と葉の隙間に多く生息しているので、その部分に薬剤がかかるように丁寧に散布する。また、周辺の収穫期を迎えているほ場に薬液が飛散しないように、風の強い時に散布する。

【いちご】

<生育の概況>

生育は地域によりばらばらついており、平年よりやや早い～やや遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均発病株率0.6%（平年0.8%）と平年並であつた。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・本病は気温20℃前後の多湿条件下で発生が著しく助長される。朝夕の冷えこみによる結露など、施設内の多湿環境を避け、循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等の耕種的な対策を行い、湿度を管理する。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果樹枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年0.8%）と平年より少なかつた。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は1.7%（平年0.9%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

防除対策

- ・発病株から周囲へと伝染するため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・気温の上昇に伴い病徴が再び進展する。特に今季は高温が続き、病徴の進展が早まっているため、本ほでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.5%（平年5.2%）と平年より多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告でも、本虫の発生について5名が「多い」または「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。なお、例年3月は気温の上昇とともに本虫の発生が多くなるため、注意する。

防除対策

- ・花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のように防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・本種の増殖源となる施設内外の雑草や花き類を除去する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は15.0%（平年12.7%）と平年よりやや多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告でも、本虫の発生について全員が「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、発生の増加も平年並と予想される。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のように防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、気門封鎖剤や天敵を積極的に活用する。なお、気門封鎖剤は殺卵効果が高く、残効性も期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。発生が多い場合には、天敵の追加放飼または天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・2月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.9%（平年1.6%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本虫の発生が増加も平年並と予想される。

防除対策

- ・寄生を認めた場合は少発生のように防除する。
- ・天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

【補】

<その他病害虫>

●いもち病(苗いもち)、ばか菌病、もみ枯菌病、苗立枯病、イネシシガレシセンチュウ

防除対策

- 種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）
- 自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- 「農業安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<https://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- 厚まきは発病を助長するため、適正な量は種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・他県ではいもち病のQoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guide/lines/>）を参照。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・県内全域で分布が拡大している。昨年7～9月に水田内や水路で赤褐色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて目を粉砕する。
- ・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触れる場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

<その他の病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

- ・昨年4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は52.6%(平年 12.6%)と平年より多かった。また、赤さび病の平均発病株率は3.6%(平年 1.9%)と平年より多かった。
- ・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、赤さび病も「イワイノダイチ」「農林61号」より発生しやすい。
- ・うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

【かんきつ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・伝染源となる夏秋梢の切除に努め、中晩柑類では発芽前に薬剤散布による防除を行う。温州みかんほ場において、本病の発生が前年に見られた場合は中晩柑類に準じた防除を行う。
- ・伝染を防ぐため、防風垣、防風網の整備等を行い防風対策に努める。

3 季節予報

●1か月予報 (東海地方 令和6年2月22日 名古屋地方気象発表)

【予報期間】 2月24日から3月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目	気温	2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多
1か月	気温	30	40	30
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	30	50	20
2週目	気温	40	40	20
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

- 1か月 : 2月24日(土)～3月23日(金)
- 1週目 : 2月24日(土)～3月1日(金)
- 2週目 : 3月2日(土)～3月8日(金)
- 3～4週目 : 3月9日(土)～3月22日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めています。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合に是对象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫発生予察情報(4月予報)

令和6年3月26日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均年値)	予報の根拠
温州みかん	そうかび病	発生量：やや少	3月上旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率5.8%)	3月上旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
かんきつ	かいよう病	発生量(中晩柑)：並 (中晩柑発病度(葉)0.71) 発生量(温州みかん)：やや少 (温州みかん発病度(葉)0.24)	3月上旬発生量 (中晩柑)：やや少 (温州みかん)：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
果樹全般	チャハネアオカメムシ	発生量：やや少	越冬虫数：少 気象予報：気温：高い (＋)
	カンザワハダニ	発生量：多 (摘採面寄生葉率2.2%)	3月上旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
茶	チャハマキ	発生量：やや多 (幼虫数0.05頭/1.25㎡)	3月上旬発生量：並 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
	チャノコカクモンハマキ	発生量：多 (幼虫数0.1頭/1.25㎡)	3月上旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
トマト	灰色かび病	発生量：多	3月中旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多 (＋)
	葉かび病・すすかび病	発生量：多	3月中旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 コナジラミ類発生量：多	3月中旬発生量 黄化葉巻病：少 コナジラミ類：多 気象予報：気温：高い (＋)

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均年値)	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：並	3月上旬発生量：少 気象予報：気温：高い 降水量：多い (＋)
	うどんこ病	発生量：やや少	3月上旬発生量：少(発生なし) 気象予報：気温：高い 降水量：多 (＋)
	炭疽病	発生量：多	3月上旬発生量：多 気象予報：気温：高い 降水量：多 (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや多 ただし、中遠地域：多	3月上旬発生量：並 ただし、中遠地域でやや多 気象予報：気温：高い (＋)
アブラムシ類	ハダニ類	発生量：並 ただし、中遠地域：多	3月上旬発生量：やや少 ただし、中遠地域でやや多 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや多	3月上旬発生量：並 気象予報：気温：高い (＋)

表の見方について

- 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- 予報の発生時期は、時期の予想ができてきた病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(＋)、少発要因の場合は(－)を示し、＋－を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報はこちらで検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

●そうか病

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病度0.06）。
 - ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。
- ##### 防除対策
- ・本病は葉や果実の生育が進むにつれ発病しにくくなるが、若い時期に発病しやすく、特に展葉初期の降雨は感染を助長するため、薬剤防除を行う。
 - ・苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。
 - ・被害のある夏秋梢は伝染源となるため、除去する。また前年に多発したほ場は伝染源を翌年に持ち越しやすいため発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は12.8%（平年3.0%）と平年より多かった。地域別の平均寄生葉率は、東部地域で2.4%（平年1.3%）、中部地域で10.0%（平年5.2%）、西部地域で25.9%（平年2.6%）と、各地域で発生が多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・着花前のこの時期は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると旧葉の落下を助長することもあるため、注意する。
- ・マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと思込まれる際に防除を実施する。

【かんきつ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は0.58（平年0.77）と平年よりやや少なかった。温州みかんの葉での発生は認められなかった（年平均発病度0.11）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は葉害が出るので発芽後～新梢伸長期は薬剤散布を避けた方がよい。
- ・伝染を防ぐため、防風垣、防風網の整備等を行い防風対策に努める。

【果樹全般】

●チャバネアオカメムシ

予報の根拠

- ・今年2月における越冬量調査において、落葉1㎡あたりのチャバネアオカメムシ越冬虫数は、県平均0.5頭（平年1.3頭）と平年より少なかった。
- ・各地域における同種の越冬虫数は、東部1.0頭（平年1.7頭）、中部0.6頭（平年1.0頭）、西部0.2頭（平年1.4頭）と、いずれも平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・地域や圃地によって発生状況が異なることから、ウメやビワでは、ほ場における発生をよく観察し、早期の発見及び防除に努める。

【茶】

<生育の概況>

茶業研究センターの報告では、新芽の生育は3月4日時点で平年より1日早かったが、その後の気温が平年より低く推移していることから平年並であると推察される。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率2.3%（平年0.9%）、裾部での寄生葉率4.5%（平年1.1%）と平年より多かった。
- ・防除員からは、平年に比べ発生がやや多い報告が複数あった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

●チャハマキ・チャノココカモハンハマキ

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.4頭/1.25㎡（平年0.3頭/1.25㎡）と平年並だった。一方、ココカモハンハマキの越冬幼虫数は0.7頭/1.25㎡（平年0.2頭/1.25㎡）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、両種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・昨年は両種ともに1世代発生が多かったことから、秋の防除を実施しなかった茶園では越冬幼虫の密度が高い可能性がある。防除適期は越冬世代成虫の発蛾最盛期の後となる。

<その他病害虫>

●褐色円星病（銀葉症）

防除対策

- ・3月上旬の巡回調査では、平均発病率は17.0%（平年19.3%）と平年よりやや少なかった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害が一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育はやや早い～やや遅く、地域によりばらつきがある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病率12.4%（平年9.2%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にするなど）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病率11.8%（平年5.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・葉かび病については、抵抗性品種（C7-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を選べる。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病率は0.3%（平年2.4%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生率は16.6%（平年8.4%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【いちご】

<生育の概況>

生育は平年並みからやや遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、平均発病率は0.5%（平年2.3%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

・本病は気温 20℃前後の多湿条件下で発生が著しく助長される。朝夕の冷えこみによる結露など、施設内の多湿環境を避け、循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等の耕種的な対策を行い、湿度を管理する。

・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる葉液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。

・株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。

・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（年平均発病株率 1.0%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されやすいため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均発病株率 2.1%（平年 1.1%）と平年より多かった。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・ 気温の上昇に伴い再び発生が増加する。今季は 2 月の高温の影響で病徴の進展が一層見られるため、本病発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。
- ・ 本病発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 11.7%（平年 11.7%）と平年並であった。地域別の平均寄生株率は、東部地域で 6.2%（平年 9.9%）、中部地域で 15.8%（平年 17.3%）、中遠地域で 13.2%（平年 7.9%）であり、中遠地域での発生がやや多かった。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のうちには防除する。
- ・ 天敵を利用しているほ場で薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。
- ・ 花はアザミウマ類の増殖源となるため、必要のない花は摘み取る。また、施設内外の雑草や花き類についても本虫の増殖源となるため、除去する。
- ・ 4 月以降、気温が高くなると本虫の飛び込みが増える。施設開口部には防虫ネット（目合 1 mm 以下）を被覆し、施設外からの本虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・ 栽培終了後は、施設を密閉するとともに蒸し込み処理を 10 日以上行い、残存虫を死滅させる。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 8.2%（平年 12.9%）と平年よりやや少なかった。地域別の平均寄生株率は、東部地域で 1.2%（平年 5.4%）、中部地域で 7.8%（平年 26.3%）、中遠地域で 15.6%（平年 7.1%）であり、中遠地域での発生がやや多かった。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生のうちには防除する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、気門封鎖剤や天敵を積極的に活用する。なお、気門封鎖剤は殺卵効果が低く、残効性も期待できないため、5 日間隔程度で連続散布する。
- ・ 天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布を行う。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は 2.6%（平年 2.2%）と平年並であった。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発生に注意し、初期防除に努める。
- ・ アブラバチを利用している場合は、寄生蛹（マミー）の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

【福】

＜その他病害虫＞

●いもち病(ぬいもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシシガレセンチュウ

防除対策

- 種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）
 - 自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
 - 「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ）<https://www.s-boujo.jp/>」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
 - 厚まきは発病を助長するため、適正な量は種量を守る。
 - 育苗管理
 - 出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
 - 他県ではいもち病のQoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。
- 耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」（<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）を参照。

●結露枯病(ヒメトビウンカ)

防除対策

- 常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

●トビイロウンカ

防除対策

- 本虫の日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

- 主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径300m程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

防除対策

- 県内全域で分布が拡大している。昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【小麥】

＜その他病害虫＞

●赤かび病

防除対策

- 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- 防除適期は開花期前後となる。一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

●うどんこ病・赤さび病

- 昨年4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は52.6%（平年 12.6%）と平年より多かった。また、赤さび病の平均発病株率は3.6%（平年 1.9%）と平年より多かった。
- 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや強く「イワノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。
- うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残遺で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- 窒素肥料の過多を避ける。

3 季節予報

● 1 か月予報 (東海地方 令和6年3月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月23日から4月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、多い確率50%です。
1週目	日照時間	日照時間は、少ない確率50%です。
2週目	気温	1週目は、高い確率60%です。
	気温	2週目は、高い確率60%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	30	60
2週目	気温	10	30	60
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

1か月 : 3月23日(土)～4月22日(月)
 1週目 : 3月23日(土)～3月29日(金)
 2週目 : 3月30日(土)～4月5日(金)
 3～4週目 : 4月6日(土)～4月19日(金)

※利用上の注意

- ・ 気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・ 晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

令和5年度 技術情報第1号
小麦 うどんこ病

令和5年4月12日
静岡県病害虫防除所長

コムギうどんこ病の多発が懸念されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

4月5日に中遠地域の小麦ほ場を調査した結果、うどんこ病(図)の発病株率は52.6%(平年12.6%)、発生面積率は100%(平年34%)と平年よりも多かった。本県の奨励品種である「きぬあかり」は本病に弱く、3月の気温が平年より高く推移したことから、発生が多くなつたと考えられる。

本病は暖冬で春先に雨が多いと多発する傾向がある。気象庁の1か月予報(4月8日～5月7日)によると、降水量は平年並みだが、気温は平年より高い見込みであることから、発生を助長すると予想される。

2 防除対策

- (1) 本病は多発すると収量・品質が低下するため、発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する(表)。
- (2) 下位葉から上位葉に向けて進展するため、株元まで薬剤が届くように散布する。
- (3) 本病の第一次伝染源は前年の被害残査で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では特に発生に注意する。
- (4) 薬剤等の詳細については静岡県農業安全使用指針・農作物病害虫防除基準(https://www.s-boujo.jp)を確認する。また、不明な点は病害虫防除所、農林事務所等指導機関に問い合わせる。



図 コムギうどんこ病の被害の様子

表 コムギうどんこ病に対する主な防除薬剤①)

作物名称	商品名	使用方法	希釈倍率使用量	使用時期	使用回数	FPMコード②)
麦類	イカリフロアブル③	散布	400倍	—	—	M2
麦類	石灰硫黄合剤③	散布	40～140倍	—	—	—
小麦	フルト乳剤2.5	散布	2000～3000倍	収穫3日前まで	3回以内	—
麦類	ワーケックフロアブル	散布	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	3
麦類	エリフミン水和剤	散布	1000～2000倍	収穫14日前まで	3回以内	—
小麦	ストロピニアフロアブル	散布	2000～3000倍	収穫14日前まで	3回以内	11
小麦	トップジンM水和剤	散布	1000～2000倍	収穫14日前まで	3回以内	—

①) 防除時期は農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準(https://www.s-boujo.jp)に掲載されている薬剤から選択(令和5年4月12日現在)に限定し、FPMコードによる)。
②) 薬剤は作用機構ごとに分類した番号。薬剤の異なる異なる薬剤をローテーションで使用する場合がある。
③) 有効成分が硫黄の剤は予防散布が中心であるため、既に発生が確認されているほ場は他剤を使用する。

【問合せ先】静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

かんきつ、落葉果樹（かき、なし、キウイフルーツ等）
果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

令和5年9月7日
静岡県病害虫防除所長

東西部地域の予察灯で、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）が8月中下旬以降、多数誘殺されています。本虫の飛来に注意し、ほ場で発生を確認したら直ちに薬剤防除を行ってください。

1 発生状況

- (1) 東西部地域の予察灯において、8月中下旬以降、果樹カメムシ類の誘殺が急増しており、場所によっては誘殺数が平年より多かった。チャバネアオカメムシの合計誘殺数は、磐田市富丘で2,006頭（平年比7.9倍）と平年より多く、磐田市敷地及び浜松市浜北区大平における誘殺数は平年並だったものの誘殺が急増した（図1）。ツヤアオカメムシの合計誘殺数は、磐田市富丘で855頭（平年比12.4倍）と平年より多かった（図2）。クサギカメムシの合計誘殺数は、磐田市富丘で50頭（平年比3.2倍）、磐田市敷地で569頭（平年比336頭、平年比1.7倍）、浜松市浜北区大平で549頭（平年107頭、平年比5.2倍）と、いずれも平年より多かった（図3）。
- (2) 8月におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年より少なかったが、磐田市富丘及び静岡市清水区茂畑では9月第1半旬に誘殺数が増加した（データ省略）。
- (3) 東西部地域の病害虫防除員等から、一部の園地（特に中山間地）で本虫の飛来を確認したとの報告が複数あった。
- (4) 本年は、県全域において本虫の数に対して餌となるヒノキ・スギにおける球果の着果量が少なかつた（図4）ことから、今後、県西部地域だけでなく、県東部・中部地域においても本虫が餌を求めて園地へ飛来し、果実を加害する恐れがある（図5）。

2 防除対策

- (1) 本虫の飛来に注意し、ほ場で発生を確認したら直ちに薬剤防除を行う。成虫の移動範囲は広いため、地域での一斉防除が効果的である。ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や台風通過後の園地では、急激に発生が増加する可能性があるのに注意する。
- (2) 薬剤防除については、病害虫防除所ホームページ（<https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>）に掲載している「病害虫防除基準」（<https://www.s-boujo.jp/>）を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数に注意する。
- (3) 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページで提供している「害虫誘殺グラフ（果樹カメムシ類）」を参考にす。

3 防除上の注意点

不明な点については、病害虫防除所、農林技術研究所果樹研究センター、農林事務所等の指導機関に問い合わせる。

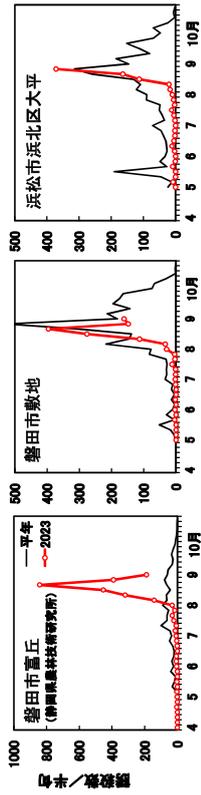


図1 予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺状況

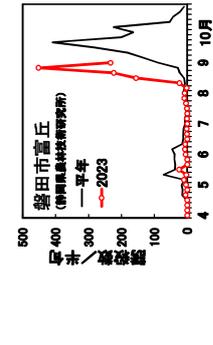


図2 予察灯におけるツヤアオカメムシの誘殺状況

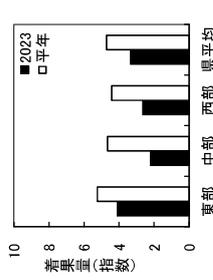


図4 ヒノキ・スギ球果の着果量

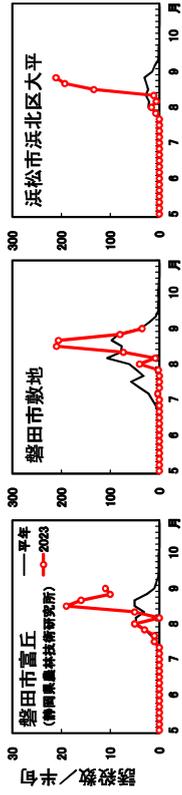


図3 予察灯におけるクサギカメムシの誘殺状況



図5 果樹カメムシ類とその被害果実

【問合せ先】静岡県病害虫防除所
〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

東部地域でトマト立枯病の発生が増えています。発病株を確認した場合は、抜き取って処分するなどの対応で伝染を防止してください。

1 発生状況

県内のトマト栽培施設で *Rusarium* 属菌によるトマト立枯病の発生が相次いでいる。西部地域の産地では全体の約3割の施設で発生の情報があり、ひどい場合はほ場内の約5割で発病が確認されている。今後気温の上昇に伴い、発生の増加が懸念される。

2 病徴

- (1) 地際部や葉かき跡に褐変、ひび割れがみられ、発病部位の内部にも進展する(図1)。
- (2) 罹病部の表面には赤色の小粒(子のう殻)を形成する場合がある(図2)。
- (3) 症状が進展すると葉の黄化、株の萎れを生じ、枯死する。

3 防除対策

- (1) 現時点で本病に対する登録農薬は無いため、耕種的な防除を実施する。
- (2) 生産資材の交換や消毒を実施する。
- (3) 発病株は伝染源となり得るため、発見後は抜き取り、ほ場外で処分する。
- (4) 栽培終了後は残株を残さず除去し、施設内の衛生管理に努める。



図1 発病部位の褐変



図2 赤色の小粒(子のう殻)

【問合せ先】静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

茶のカンザワハダニが平年よりも多く発生しています。今後多発生が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

2月上旬に県内5地域(富士山麓、静岡市北部、牧之原、小笠・磐田原、川根)の各10地点の巡回調査を実施した結果、樹冠面におけるカンザワハダニの平均寄生葉率が1.6%(平年0.4%)、裾部での平均寄生葉率は3.4%(平年1.2%)と、平年より多かった(表1)。特に、小笠・磐田原地域の平均寄生葉率が3.3%(平年0.4%)、牧之原地域が2.6%(同0.2%)と多かった。

越冬雌成虫の休眠調査の結果、調査時点で98.1%(平年79.8%)が非休眠であり、産卵を始めている。気象の1か月予報(2月22日気象庁発表)によると、気温、降水量ともほぼ平年並であることから、発生の増加も平年並と予想される。

2 防除対策

- (1) 樹冠面の葉に寄生が認められる場合は、速やかに防除を実施する。
- (2) 裾部の葉に寄生が認められる場合には発生状況に注意し、ハダニが樹冠面に上がっていくようであれば早めに防除を行う。
- (3) 薬剤防除については静岡県農業安全使用指針・農作物病害虫防除基準(<https://www.s-boujo.jp>)を確認する。また、不明な点は病害虫防除所、茶業研究センター、及び農林事務所等の指導機関に問い合わせる。

表1 茶の樹冠面におけるカンザワハダニ発生状況

地域名	静岡市		小笠・磐田原		川根		県全体
	富士山麓	北部	牧之原	磐田原	川根	小笠	
樹冠面寄生葉率(%)	本年 0.7*	1.2	2.6	3.3	0.3	0.3	1.6
	平年 0.4	0.5	0.2	0.4	0.3	0.3	0.4
発生面積率(%)	本年 30	50	70	40	30	40	44
	平年 19	21	13	17	17	17	17

* 数値は10地点の平均値。平年は過去10年間の平均値。

【問合せ先】静岡県病害虫防除所

〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

令和6年2月28日
静岡県病害虫防除所長

いちごのアザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ) が平年よりも多く発生しています。今後、気温の上昇とともに本虫がさらに増殖し、被害の発生が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

- 令和6年2月中下旬に行ったいちご巡回調査では、アザミウマ類の平均寄生株率は9.5% (平年5.2%)、発生面積率は57.0% (平年31.3%) と平年より発生が多く (表1)、過去10年間で2番目に発生が多かった。
- 同様に、地域別の寄生株率及び発生面積率は、東部地域では2.0% (平年2.8%) 及び50.0% (平年24.0%)、中部地域では21.8% (平年10.5%) 及び70.0% (47.0%)、中部地域では4.8% (平年2.3%) 及び50.0% (平年23.0%) と、特に中部地域で発生が多かった (表1)。
- 病害虫防除員6名からの報告でも、本虫の発生について5名が「多い」または「やや多い」と回答した。
- この冬は気温が平年より高く推移しているため、本虫の増殖が助長され、多発したと考えられる。今後、気温の上昇とともに本虫がさらに増殖し、果実被害の発生が予想されるため、注意が必要である。

2 防除対策

- 本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- 施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため、除去する。
- 天敵を利用している場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- 薬剤防除については、「静岡県農業安全使用指針・農作物病害虫防除基準」 (<https://www.s-boujo.jp/>) を参照する。
- 不明な点については、病害虫防除所、農林事務所等の指導機関に問い合わせる。

表1 県内各地域のいちごにおけるアザミウマ類の発生状況 (2月中下旬)

	東部	中部	中遠	県平均
寄生株率 (%)	本年 2.0 平年 2.8	21.8 10.5	4.8 2.3	9.5 5.2
発生面積率 (%)	本年 50.0 平年 24.0	70.0 47.0	50.0 23.0	57.0 31.3

注) 各地域10ほ場、1ほ場あたり50株を調査。



図1 ヒラズハナアザミウマ雌成虫
注) 体色：淡褐色～暗褐色
体長：1.3～1.7mm



図2 いちごの花に寄生するヒラズハナアザミウマ
注) 矢印：ヒラズハナアザミウマ



図3 アザミウマ類による
いちご果実の被害 (褐変症状)

【問合せ先】 静岡県病害虫防除所
〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>